

子供どうし

小川未明

青空文庫

学校から帰りの二少年が、話しながら、あまり人の通らない往來を歩いてきました。

「清ちゃん、あのお庭に咲いている赤い花はなんだか知っている？」と、一人が、立ち止まって垣根の間からのぞこうとしたのでした。

「孝ちゃん、花じゃない、赤い葉鶏頭だよ。」

「ちよつと見ると、花みたいだね。」

「孝ちゃん、この門は古いんだね、ここについているのは、呼び鈴だろう。」

「呼び鈴だけど、きつときかないんだよ。」と、孝二がいました。

「どうして？ 押せば鳴るんだろう。」

「だって、線がついていないじゃないか。」と、孝二が、あたりを見まわしていました。

「押してみようか。」

「もし、人が出てきたら、どうするの。」

「逃げようよ。」

二少年はそんなことをいって、顔を見合つて笑いました。

「孝ちゃん、お押しよ。」

「清ちゃん、お押しよ。」

「よし、押してみようか……。」と、清吉が、脊伸びをして、ボタンに指をつけようとすると、孝二は、はや逃げ腰になつていました。

「孝ちゃんずるいや、いっしょに逃げようよ。」

そういつて、清吉は、白いボタンを押したのですけれど、なんのてごたえもありませんでした。

「だれもこないよ。」

「いまに、出てくるよ。」

「やはり、きかないのだ。」

そんなことをいつていると、玄関の戸が開く音がしました。二人の少年は、足音のしないように走つて、すぐ傍らの畑に生えているすすきの蔭に隠れてしまいました。このあたりは、昔は畑地で、最近町になつたのであつて、まだどこどこに空き地や、畑がありました。もう秋が近づいたので、すすきには白い花が咲いていました。

二人は、息をこらして、耳であちらのようすをうかがっていると、門のところまできた

足音あしおとが、しばらくそこに止とまっていたが、また引き返ひかえしていったようでした。二人ふたりは、また顔かおを見合みあつて、にやりと笑わらいました。

「もうお家うちへ入はいったね。」

「ごらんよ、あの呼び鈴よりんは、きこえるのだから。」と、清吉せいきちが、いいました。

「おもしろいね、もう一度どやってみようか。」と、孝二こうじが、いいました。

「つかまつたら、たいへんだ。」

「つかまるもんか。」と、孝二こうじは、愉快ゆかいそうでした。

「もうすこし待まっておいでよ。」

二人ふたりの少年しょうねんは、すすきの蔭かげから、顔かおを出だして往來おうらいの方ほうをながめていました。同じおな組くみの岡田おかだが、ぞうり袋ぶくろをぶらさげながら、帰かえっていきました。

「孝二こうじちゃん、岡田おかだも呼よぼうか？」

「岡田おかだは、足あしがおそいから、だめだよ。」

「つかまるといけないね。」

往來おうらいに通とおる人ひとがないのを見みとどけて、二人ふたりはまた古い門もんの柱はしらへ近寄ちかよりました。こんどは、孝二こうじがボタンを押おしたのです。すると、すぐに戸とが開あいて、だれかこちらへ駆かけてく

る足音あしおとがしました。二人ふたりは、おどろいて、一目散いちもくさんに往來おうらいをあちらへ走はしつていきました。二人ふたりは、うしろを見みないようになりました。なぜなら、後あとを追おつてくる足音あしおとがきこえたからです。

「清せいちゃん、追おっかけてきたよ。」

「ほんとうかい。」

二人ふたりは、息いきを切きらして、往來おうらいを走はしりました。前方ぜんぽうに岡田おかだが歩あるいています。岡田おかだのそばを走はしりすぎるとき、清吉せいきちは、自分じぶんのかばんを投ほうり出して、

「岡田おかだくん、たのむよ。」といいました。

かばんを頼たのまれた岡田おかだは、どうしたんだろうと思おもつて、振ふり向むくと、女おんなの子こが、二人ふたりの後あとを追おつてきました。

「あんた、あの子このお友ともだちなの。」と、女おんなの子こが、真まっ赤かな顔かおをして、聞ききました。

「なんだって、いいじやないか。」と、岡田おかだは女おんなの子こに、答こたえました。

「あの子こ、どこの子こ。」

「そんなこと知しるものか。」

女おんなの子こは、また二人ふたりを追おいかけました。

「足の早い女だな。」と、岡田は、見送っていました。

「孝ちゃん、また追いかけてきたよ。」

「しつこいやつだね。どこかへ曲がろうよ。」

二人は、ぐるぐると横道をまがって、紛らそうとしました。しかし、やはりだめでした。追いかけてきた女は、すぐうしろへ追っていました。

ある大きな木の下の下へきたとき、まず清吉がへこたれてしまいました。

「ああ、苦しい。」と、うずくまったのであります。

孝二は、追いかけてきた女の子をにらみました。まだ十五歳ぐらいで髪をお下げにして、短い服を着ていました。

「なあんだ、田舎つぺの女中か。」と、孝二は思つて、生意氣をいったら、なぐろうと考えました。

「おまえたち、あんないたずらをしていいか。」と、女が叫びました。

「わるかった。」と、清吉は、おとなしくあやまりました。

「ほんとうに、もうしないか、おまえもか。」と、女は、こんど孝二にいいました。

「知るもんかい。」

「こんどしたら、ひどいから。おら、田舎いなかの学校がっこうで、徒歩競走とほきようそうの選手せんしゅなんだぞ。」
と、女おんなの子はいいました。二人ふたりの少年しょうねんは、なるほど足あしが速はやいと思おもつて、苦笑にがわらいしました。

「おら、どう帰かえつたらいいかな。」と、女おんなの子は、急きゆうにやさしくなつて、聞ききました。

「田舎いなかつぺのくせに、生意氣なまいきだな。」と、孝二こうじが、いいました。

「おいでよ、道みちを教おしえてあげるから。」と、清吉せいきちは、さつきの往來おうらいまで、女おんなの子をつれていつてやりました。

「おら、奥おくさまにいいつかつて、つかまえたんだから、わるく思おもわんでくんない。」と、女おんなの子は、頭あたまを下さげて、去さりました。二人ふたりの少年しょうねんは、これを聞きいて、なんだか涙なみだぐましくなりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

※表題は底本では、「子供《こども》どうし」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年2月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供どうし

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>